

教会をめぐるキリスト教教育の課題

－なぜ教会に人が来ないのか¹⁾

長 山 道

1. 宗教の私事化・個人化 ―教会的キリスト教の後退

世俗化の議論が盛んであった1960年代後半、組織神学者トゥルツ・レントルフ（1931-2016）は、教会的なキリスト教が後退し、クリティカルで非教会的なキリスト教が、キリスト教の新しい形態として現れてきているという仮説を提唱した²⁾。彼にとってこれは憂うべき事態ではなく、むしろポジティブな変化であった。啓蒙時代以来、人間の「宗教的主体性」は解放され、キリスト者は教会から解放された³⁾。こうしてキリスト教は今や教会という形式を克服し、より大きく自由な、一般的なものになっていくと考えたのである。主体化したキリスト者にとって、一般化されたキリスト教となった社会は、「適切な社会的・精神的生活空間」⁴⁾である。このようにしてキリスト教の発展と社会の発展は一致し、これこそが現代のキリスト教にふさわしい形態となるはずであった。

確かに教会的なキリスト教は、レントルフの予想通りその後もますます後退の一途を辿った。しかしそれは、社会が高度にキリスト教化して、教会に代わるものとなったからではなかった。また、人間が批判的理性を一層身につけて、主体的な信仰者になったからでもなかった。1970年代に入り、宗教の私事化が指摘されるようになる頃に指摘されたのは、教会的なキリスト教に代わって「日常的な宗教性」⁵⁾、「中立化された宗教」⁶⁾が社会の中で一般的となったこ

とである。これは、世俗化論の時代に期待されていたような、主体性ある人間のクリティカルで理性的な反省を経たキリスト教ではない。よしんば教会生活を続けているとしても、それは批判的に吟味した上での結論ではなく、「決断なき宗教」⁷⁾であり、個人の宗教的嗜好に過ぎない。例えば結婚式や葬儀を教会で行うことを、根拠ははっきりしないながらも習慣として当然とみなす。また、教会を離れたとしてもそれは教会が現代人の知性と自立心に耐えられなかった結果ではない。実践神学者であり社会学者でもあるカール＝ヴィルヘルム・ダーム（1931-）が指摘しているように、「教会に縛られた宗教性は、批判的理性と解放された啓蒙に取って代わられたのでは決してなく、むしろ平凡さとくだらなさにとって代わられた」⁸⁾。このことは現代においてなお、占い、幽霊、お守り、おまじない等が廃れることなく、一定の役割を果たしていることにも表れていると言えよう⁹⁾。宗教的な真理は、社会秩序や伝統的な自明さといった客観的な現実性を奪われ、人間の意識の中でも確実性を奪われて、「主体的」というよりも「主観的」なものになったのである¹⁰⁾。その結果、宗教は歴史や宇宙や社会よりも個人の実存や心理に関わるものになった。

それでは、レントルフの予想は外れたのであろうか。確かに教会的キリスト教の後退は、彼が想定していたようなキリスト教の新しい形態には結び付かなかったものの、キリスト教教育学者カール・エルンスト・ニプコウ（1928-2014）によれば、キリスト教と社会の展開――これを発展と呼ぶかどうかはともかくとして――が一致するという点では当たっている¹¹⁾。というのも、現代の資本主義構造が、人間の内面に向けられた宗教を必要としているとき、まさに時を同じくして、キリスト教も個人の実存や心理に関わるものとなっているからである。つまり個人化されたキリスト教は、個人に対して「産業界や官僚的な大規模組織における現代の権力構造を通してたらされる失望や不満を吸収し」、「同時に、個人の第二の社会・文化的誕生に大きく貢献し、業績主義社会の中に入って変化する要求に適応できるよう動機づけ」、「再生と休養に役立つ」。このようにして「公的な仕事と私的な幸福の厳密な区別をはっきりさせ」¹²⁾、社会の構造を変革させるよりも、むしろ「近代的な経済・政治制度の

合理化された秩序を維持するために機能」¹³⁾しているのである。教会の中でも、学歴社会・競争社会に疲れた人に慰めを与え、それでも社会の中で役割を果たすよう鼓舞し、世の中へと送り出そうとする言葉が語られ、求められているのではないであろうか。ドイツ福音主義教会が2022年に行った大規模調査でも、人々は教会に社会変革を期待してはいない（それよりも教会が改革されることを望んでいる）。人々が教会に期待しているのは、「人生の問題に直面した人の相談所」である。そして、とりわけ教会を離脱した人々の7割は、教会に子どもの教育も期待していない¹⁴⁾。

そのようなわけで、キリスト教教育学者ベルント・シュレーダー（1965-）によれば、

多くの宗教教育者は、現代における宗教（キリスト教）の形態の変化に鑑みて、もはや自分たちの分野を本質的に教会に関係するものとは見ておらず、その代わりに、例えば「宗教的文化解釈学」のパラダイムにおいて、単にいくつかの「宗教的自己形成の可能な空間」（ヴィルヘルム・グレープ）の一つとして視野に入れているか、あるいは「世俗的な宗教教育学」（ディートリヒ・ツイレセンとベルント・ボイシャー）として展開しているにすぎない。¹⁵⁾

「個人の宗教的自己形成」¹⁶⁾としてのキリスト教教育は、教会なしでも可能であるし、しかもその際、現代人にとって異質なものとなった教会の教義を擁護する必要もない。教会なしに宗教性を涵養しようとする教育思想は、ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチ（1746-1827）やジョン・デューイ（1859-1952）など、近代以降の教育思想史からすでに見られるものであった。その「宗教性」がたとえキリスト教的のものであったとしても、教會的であるとは限らないのである。

2. キリスト教教育の内容としての教会

人間は宗教的に白紙の状態で生まれてくるのではない。心理学者ジャスティン・バレット（1971-）の実験によれば、人間は「何かがこの世界を導いている」という素朴な感覚を子どもの頃から持っており、幼い頃から「神」を信じることに慣れ親しんでいる¹⁷⁾。日本の人口のほとんどは無宗教と言われるが、しかし宗教性が皆無なわけではないし、神とは何かを考え抜いた上で無神論に立っている、本当の意味での無神論者も、ほとんどいないであろう。人間が皆何らかの宗教性を持っているのであれば、宗教性そのものをキリスト教的に養うことも不可能ではない。ただし、それが教會的な信仰になるわけではない。

前述のドイツ福音主義教會の調査では、教會に属する人数の激減も衝撃的であったが、教會になおとどまっているとしても、教會に定期的に通っているわけではないし、教會は自分の人生にとってほとんど意味を持たないと考えている「キリスト者」が6割以上に上ることも、また印象的であった¹⁸⁾。ある日本のキリスト教学校卒業生へのインタビューによると、彼女たちはよくキリスト教を理解し、知識以上のものを教えられ、祈ることを身につけ、神に信頼していて、教師から見ても洗礼を受けてもおかしくはないと思われるほどであったにもかかわらず、ほとんどのケースで洗礼を決意しなかった。「キリスト者」になるということと、「教會員」になることが彼女たちにとって同じではなかったからである。キリスト教学校で6年間学んだ上、教會学校に通っていた者もいたが、それでも教會が自分自身に関係するものだと教えられてはこなかったのである。彼女たちは、「キリスト者」になりたいと思ったとしても「教會員」になりたいとは考えなかった¹⁹⁾。

実践神学者ディートリヒ・レスラー（1927-2021）は、現代におけるキリスト教が「個人」、「教會」、「社会」という三つの形で存在していると考えている²⁰⁾。この区分に従うならば、キリスト教教育も「個人」、「教會」、「社会」のレベルで教えることになる。あの卒業生たちは、「個人の宗教的自己形成」を

教えられ、キリスト教を通して文化的・社会的に自己を相対化することを学び、現代社会を形成している重要な諸概念がキリスト教に根を持っていることも知っている。つまり、「個人」、「社会」のレベルではキリスト教教育を受けていたものの、「教会」についてはそうではなかったということである。

アウクスブルク信仰告白第7条に示唆されているように、教会は信じる者の群れである。だから、これまでキリスト教と全く無縁だった人、キリスト教に反感を持っている人にも、キリスト教が自分に関係があるということ、悪いものではないこと、人生に意味を与え、不安なときに平安を与え、生き方を指し示すものであること、さらには今生きているこの社会に欠くことのできない重要な価値観や制度がキリスト教から生まれたものであることを教え、信じたい、キリスト者として生きたいという気持ちを起こさせて教会に送ることができれば、その人は当然教会に定着するはずである。ところが実際には、それはなかなか実現しない。教会の受け止め方が悪いからであろうか。教会が新来者を歓迎していないせいであろうか。

実のところ、筆者が出講している2つのキリスト教大学で学生たちが提出する教会レポートには、初めて行った教会で歓迎されなかったとか、マイナスの経験をしたという記述はかなり少ない。むしろ温かく歓迎されたことを喜び、礼拝の経験を貴重なものと感じ、地域にこのようなコミュニティがあることを好ましく思うケースがほとんどである。しかし、だからと言ってその日を境に毎週教会に通うようになるということはずまない。

つまり、妨げとなっているのは、個々の教会の受け入れ体制や歓迎の仕方など、自前の問題だけではないことに留意すべきである。1節で述べたような個人化プロセスなど、社会全般の発展要因もまた、教会を世間の関心からますます遠ざけている。カトリック教育学者ノーベルト・メッテ（1946-）と改革派神学者ミヒャエル・ヴァインリヒ（1950-）が述べるとおり、キリスト教信仰が単なる私的な事柄ではなく、共同生活の具体的な形（conviviality, Konvivialität）の中に現れる根本的な社会的側面を持っているという洞察を伝えることが、以前にも増して難しくなっているのである²¹⁾。

このことは、教会の中でも当てはまる問題ではないであろうか。外出自粛の時期が過ぎて、礼拝出席者数は多少持ち直してきたようであるが、十分に回復してはいない²²⁾。教会に赴いて礼拝に与ることの重要性が見失われている可能性はないであろうか。キリスト教教育の内容としての教会は、場としての教会でもなお十分に学ばれていないのかもしれない。

3. キリスト教教育の場としての教会

教会は、キリスト教信仰にとって本質的である。1節で見たように、世俗化論の結果わかったことは、「個人」のレベルでキリスト教教育を施しても、主体的な信仰者が生まれるわけではないということであった。個人の信仰は、教会という共同体の中で養われるものであることがここに現実を示されていると言えよう。

しかしほとんどの人にとって、教会は異質な場所である。例えば、40年近く人気を博している日本のゲーム「ドラゴンクエスト」に登場する「教会」は、「のろいをとく」、「いきかえる」、「どくのちりょう」をするなどのための場所であり、寄付金が要求される、現実の教会とはかけ離れたものである。先に述べたキリスト教学校の卒業生たちにはキリスト教の知識があるにもかかわらず、彼女たちにとってもなお教会は「マイナーで奇妙な団体」、そして洗礼は単にその「マイナーで奇妙な団体への入会儀礼」と見えていた²³⁾。「見える教会」も、実は外からはほとんど見えていないのである。

教会に関心が持たれず、教会が知られていないならば、決定的な批判に直面することが教会にとって一番の困難になるわけではないであろう。それよりも、キリスト教教育が接する人々がほとんどの場合、教会について「土台にできるような重要な経験を持っていないこと」²⁴⁾の方が困難なのではないであろうか。

教会の子どもたちの場合はどうであろうか。教会の内部でも、信仰継承の危機の問題が起こっている。アメリカのキリスト教教育学者チャールズ・R・

フォスター（1937-）は、「学校の競技大会、スポーツの試合、その他の地域の活動が日曜日の朝に行われるようになり、なかには信仰形成について親の理解が得られないといった状況も起こっている」という牧師たちやキリスト教教育者たちの言葉は、「なぜ子どもたちの出席が四年生以降に急に減少するのかを説明するいくらかの助けにはな」っても、「離れていった子どもたちにいったいなにが起こったのかを説明しきれてい」ないと指摘している²⁵⁾。こうした子どもたちは、いつか教会に戻って来るだろうと期待されていたものの、結局そうではなかったことがすでに明らかになっているのである²⁶⁾。

教会で小児洗礼を受けたり献児式を行ったりした現代青年の三分の二は、すでにその教会にもその教派にも属していないという結果が出されています。すでにどこかの教会員であるという人たちも、多くは自分の期待に合ったところが見つかるまで、方々の教会を「買い物」（物色）して歩いたといいます。しかし、そうして期待する教会に行きついたとしても、多くの場合、それは彼らが幼少期に育った教会ではなく、テレビ伝道をしている団体、教派色のない教会、パラチャーチの青年伝道、人気が集まって注目されている教会、そして人気コンサートのような豪華な演出をする教会でした。それ以外の多くの人々は、教会から離れたが最後、再び戻ってくることはないと言います。²⁷⁾

フォスターは、今日の教会が「子どもたちや青年たちを、イエス・キリストの弟子として養育することよりも、彼らの宗教経験を豊かなものにするための教育により熱心になっている」、「毎日直面している課題を通して子どもたちが共にイエスに従っていくために何が必要であるかということよりも、子どもが望むもの、喜ぶものは何かということにより注意が払われてい」と警告する²⁸⁾。「その目指すところは、つくり変えられることなく、エンターテインメントとなっていく」と²⁹⁾。そしてその結果、信仰の継承には到達できていない。彼が指摘しているように、これは「技術的な問題」ではない³⁰⁾。もちろん、

子どもたちや青年たちに退屈な押しつけを強いることはできないが、教会でのポジティブな経験が何をを目指しているかをより意識化する必要があるであろう。「一人ひとりの魂の救いのために」という伝道の志は、誤ってはいないものの、すでに指摘したように個人化、さらに私事化した現代社会に合致しすぎている。教会においても「信仰的伝統を刷新していくことではなく、個人の霊性により重きが置かれて」³¹⁾しまう。その結果、子どもたちが「幼少期に育った教会」を離れたとしても、「テレビ伝道をしている団体、教派色のない教会、パラチャーチの青年伝道、人気が集まって注目されている教会、そして人気コンサートのような豪華な演出をする教会」など、とにかく何らかの教会に連なっていてくれさえすればいいと考えるべきであろうか³²⁾。宗教社会学者ウェイド・クラーク・ルーフ（1939-2019）が述べるとおり、こうした傾向は「教義、信条、制度以外のもの」を追求することを助長している³³⁾。教派に対する「教派主義、自由の欠如、不寛容」³⁴⁾といった否定的なイメージも、この傾向を後押ししている。こうして、フォスターの言葉を借りれば「旧メインライン」³⁵⁾の教会は信仰の継承に失敗することとなった。今日「伝統的なものの定義化と永続化という作業は、はるかに意識的かつ責任的な取り組みを伴うものとなった」のである³⁶⁾。確かに教会という場は、それだけでキリスト教教育的に大きな意味を持つ。しかし子どもたちや青年を場としての教会に引き留めておきさえすれば、自ずと教会の伝統的な信仰が継承されていくという希望は、もはや当てにならないのかもしれない。

前述のメッテとヴァインリヒによれば、教会を体験する最も持続可能なやり方は、身近で双方向的にすることである。従って、可能な限り、教会はそのような体験とリンクさせるか、少なくともリンクさせてテーマ化されるべきである³⁷⁾。教会のイメージの悪さに対しては、

「より多種多様な形で教会の現実の存在に親しむことができるように、できれば教会に関わる人々や場所との具体的な出会いを可能にする。教会の暗い面は決して隠すべきでないが、説得力のある方法でできるのであれ

教会をめぐるキリスト教教育の課題－なぜ教会に人が来ないのか

ば、教会の明るい面を補うべきである」³⁸⁾。

4. キリスト教教育の担い手としての教会

教会はもちろん、キリスト教教育の担い手でもある。ただし、教会は第一義的に教育機関なのではない。福音をあらゆる形で伝えるものであり、とりわけ優先されるのは礼拝である³⁹⁾。そのような教会の営みの中で、教会が教会を教えるとはどういうことであろうか。

教会は「学習共同体」⁴⁰⁾であると言われるようになって、すでに50年ほどになる。学習共同体であるということは、互いに学び合うということである。ここに含意されるべきであるのは、教会の伝統的な信仰が「既知の信仰として、固定された文書として、教会組織として、思考の広がり、自由と寛容を妨げる傾向のある告白を実践」する仕方で一方向的に教えられるべきではないということである⁴¹⁾。新約聖書学・キリスト教教育学者であるヘルベルト・ウロンスカ(1936-)の指摘を待つまでもなく、子どもたち(そして大人たちも)の多くは、制度的なセーフガードに隠れることなく、信頼できる人物を教師に求めている⁴²⁾。問題や葛藤に対する答えを期待し、指導を求めるとき、それは「教会の対応システム」からではなく、信頼できる人に求めるのである。人間を素通りし、伝統や制度の助けを借りて告白の信憑性の責任を負おうとする試みは、キリスト教教育を台無しにしてしまうであろう⁴³⁾。

そこでキリスト教教育に必要な要素としてほとんど全てのキリスト教教育学者が挙げるのは、対話的な構造である。

例えばニブコウによれば、教会生活の中で、人は共同の行動(祈り、礼拝への出席、信仰に関連した公私にわたる行動など)を通して、参加すること、同じように感じること、同じように考えることを学ぶ。そのコンセンサスが得られるということは、部外者からは押しつけや過剰な要求と判断されかねない行為形態が正当になることを意味する(原則として、これは学校での授業にも適用される)⁴⁴⁾。もし誰かが疑問、反対、抵抗を示したとき、以前は暗黙のうち

に前提され、暗黙のうちに共通理解を可能にしていた妥当性の意味が問題になりうる⁴⁵⁾。対話的な教会教育は、単なる現状肯定を目的としているのではなく、固定されているように見える既知の信仰に改めて合意し、信仰者が新たな生き生きとした意味を学ぶ、あるいは常に改革される教会に参加する、主体的な信仰を形成するものである。前述のレントルフは「宗教的主体化」の起源を啓蒙主義に求めたが、それはさらに宗教改革における全信徒祭司主義の原理にまで遡ることができるものである。そして宗教改革の思想では、全信徒祭司主義と「全信徒の集まり」（アウクスブルク信仰告白7条）である教会は両立するはずのものであった。この両立は、教会の中でなされるこうした対話によって可能とされるのではないであろうか。

逆に、この討議的⁴⁶⁾意思疎通がなければ、昨年取り沙汰されたいわゆる「宗教2世」問題に見られるように、教育は強制となってしまう⁴⁷⁾。ニブコウの指摘によれば、教会では教え込み型の学びをする誘惑は小さくない。教会ではまだそれが可能だからである⁴⁸⁾。しかし真理とは、真理という名の下に人間が人間を意のままにすることができ、またしてよいというような仕方で扱えるものではないのである⁴⁹⁾。

一方、学校でのキリスト教教育では、一貫して生徒に目を向け、生徒に決定させる誘惑は小さくはない。状況がそうさせるからである⁵⁰⁾。多様性を容認、肯定、保護することは必要であるが、多元主義への素朴なアプローチは、「社会的なコントラスト、矛盾、不平等だけでなく、それらに結びついたキリスト教と教会における葛藤に満ちた状況をイデオロギー的に曖昧にするものである」、また「真理の問題を無化する危険性がある」ということをニブコウが明らかにしている⁵¹⁾。彼によればコンセンサスは、

確かに多元性を受け入れるが、その拮抗の上ではなく中で、しかも真理の問題を通しての断固とした利用の下である。このモデルは対立のモデルであり…、神学的に言えば証し、教育学的に言えば客観化された態度表明を含む。客観的な態度表明として、後者は教師と学習者の間で可能な限り

教会をめぐるキリスト教教育の課題－なぜ教会に人が来ないのか

オープンで対称的なコミュニケーションという基本的な姿に組み込まれており、子どもや青年を相手にするときでさえ、議論的な発言と反論的な発言という対話構造にコミットしている、そうすることで、彼らは自己責任に基づく態度を身につけ、自分の言葉で話すことを学ぶことができる⁵²⁾。

さらにメッテとヴァインリヒによれば、教会は、「聖書の視点、歴史的特徴、社会学的側面、他の教派との比較、世界の教会やエキュメニカルな文脈など、さまざまな角度から探求できる複雑な構造」を持つ。テーマの完成度ではなく、むしろ「学習プロセスに関わるすべての人々にとって、新たな驚くべき発見をすること」が重要なのである⁵³⁾。

*

なぜ教会に人が来ないのか。そこには、教会の受け入れ方の問題だけでなく、個人主義化、宗教の私事化、伝統の継承の困難化といった社会構造的な問題がある。しかし皮肉なことに、自律的に生きようとすることは、他者に依拠して生きることと密接に関連している。個を確立することは、他者を参照すること抜きには成り立たないからである⁵⁴⁾。教会共同体は、個々の信仰者に必要なものである。イエス・キリストはわれわれを自由にし（ガラ5:1）、また一つにする（エフェ2:14）。このことに基づいて、教会における教育は、とらえることはできないが約束された、常により大いなる真理、キリストにおける一致に服するものである⁵⁵⁾。

(ながやま・みち)

注

- 1) 本稿は、東京神学大学主催第52回教職セミナーでの発題（2024年1月11日）に加筆したものである。

- 2) Trutz Rendtorff, Zur Säkularisierungsproblematik. Über die Weiterentwicklung der Kirchensoziologie zur Religionssoziologie, in: J. Matthes: Religion und Gesellschaft, Reinbek b. Hamburg 1967, S. 208ff.
- 3) Rendtorff, a.a.O., S. 225.
- 4) Rendtorff, a.a.O., S. 226.
- 5) Karl-Wilhelm Dahm, Religiöse Kommunikation und kirchliche Institution, in: K.-W. Dahm, N. Luhmann, D. Stoodt: Religion – System und Sozialisation, Darmstadt u. Neuwied, 1972, S. 148.
- 6) Dieter Stoodt, Religiöse Sozialisation und emanzipiertes Ich, in: K.-W. Dahm u. a.: Religion – System und Sozialisation (a.a.O.), S. 220.
- 7) Hans Otto Wölber, Religion ohne Entscheidung, Göttingen, 1959.
- 8) Karl-Wilhelm Dahm, Religiöse Kommunikation und kirchliche Institution (a.a.O.), S. 146.
- 9) Karl Ernst Nipkow, Grundfragen der Religionspädagogik, Band 2: Das pädagogische Handeln der Kirche, Gütersloh, ³1984, S. 70f.
- 10) ピーター・L・バーガー（蘭田稔訳）、『聖なる天蓋 神聖世界の社会学』ちくま学芸文庫、2018年、263、271、286頁参照。
- 11) Nipkow, a.a.O., S. 71ff.
- 12) Yorick Spiegel, Gesellschaftliche Bedürfnisse und theologische Normen, in: Theol. Pract. 7 (1971), 3, S. 216ff.; Nipkow, a.a.O., S. 73. この指摘は本来家庭について言われたものであったが、教会にも当てはまっている。
- 13) バーガー前掲書232頁以下参照。
- 14) Evangelische Kirche in Deutschland (hrsg.), Wie hältst du's mit der Kirche? Zur Bedeutung der Kirche in der Gesellschaft. Erste Ergebnisse der 6. Kirchenmitgliedschaftsuntersuchung, Leipzig, 2023, S. 48-55.
- 15) Bernd Schröder, Religionspädagogik, Tübingen, 2012, S. 225.
- 16) Wilhelm Gräb, Sinnfragen, Gütersloh, 2006, S. 200.
- 17) ジャスティン・L・バレット（松島公望監訳）、『なぜ子どもは神を信じるのか？人間の宗教性の心理学的研究』、教文館、2023年。
- 18) Wie hältst du's mit der Kirche? (a.a.O.), S. 44. これによると、プロテスタント教会に属している回答者の32%は「自分はキリスト者ではあるが、教会は自分にとってあまり意味を持たない」と考えており、2%は「自分は宗教的だが、キリスト者ではない」、8%は「宗教的な必要は既成の宗教によってではなく個人的に満

たしている」、5%は「何を信じたらいいかわからない」、13%は「自分に宗教は必要ない」と答えている。「教会に強く結びついている」、あるいは「批判はいろいろありながらも結びついている」と感じている回答者は合わせて39%である。

- 19) 箕口窓香、「中高一貫キリスト教学校が生徒に与える キリスト教的影響についての質的研究 —『6年間の学校生活の間に彼らは何を学んだのか?』『なぜ洗礼を受けなかったのか?』—」、東京神学大学総合研究所『伝道と神学』14号、2024年、204-206頁。
- 20) Dietrich Rössler, *Grundriss der Praktischen Theologie* (1986), Berlin, ³2024.
- 21) Norbert Mette u. Michael Weinrich, Art. Kirche, Gemeinde, in: Norbert Mette u. Folkert Rickers (hrsg.), *Lexikon der Religionspädagogik*, Band 1, Neukirchen, 2001, Sp. 1033.
- 22) Wie hältst du's mit der Kirche? (a.a.O.), S. 63.
- 23) 箕口前掲書、212頁。
- 24) Norbert Mette u. Michael Weinrich, a.a.O., Sp. 1034.
- 25) チャールズ・フォスター（伊藤悟訳）、『世代から世代へ 教会における信仰形成教育の適応課題』、教文館、2022年、88頁。
- 26) Dean R. Hoge and David A. Roozen, *Understanding Church Growth and Decline, 1950-1978*, Pilgrim Press, 1979; Wade Clark Roof and William McKinney, *American Mainline Religion: Its Changing Shape and Future*, Rutgers University Press, 1987; Dean R. Hoge, Benton Johnson and Donald A. Luidens, *Vanishing Boundaries: The Religion of Mainline Protestant Baby Boomers*, Westminster John Knox Press, 1994.
- 27) フォスター前掲書89頁。ニプコウも、「一般的な消費者の行動と選択は、宗教的な提供をも選択する消費者の態度に対応している」と指摘している。(Nipkow, a.a.O., S. 71, 74f.)
- 28) フォスター前掲書104頁。
- 29) フォスター前掲書105頁。
- 30) フォスター前掲書91頁。
- 31) フォスター前掲書104頁。
- 32) フォスター前掲書89頁。
- 33) フォスター前掲書105頁。Wade Clark Roof, *Spiritual Marketplace*, Princeton University Press, 2001, pp. 33-35.

- 34) P. C. Bloth, Konfessioneller als konfessorischer Religionsunterricht, in: EvTheol. 34 (1974), 4, S. 351
- 35) フォスター前掲書9頁。フォスターは、メインラインと呼ばれる教会が教勢を落とし、もはや主流ではなくなったため、このように呼んでいる。
- 36) Roof, a.a.O., p. 311.
- 37) Mette u. Weinrich, Art. Kirche, Gemeinde, Sp. 1042.
Wie hältst du's mit der Kirche? (a.a.O.), S. 63.
- 38) Mette u. Weinrich, Art. Kirche, Gemeinde, Sp. 1042.
- 39) Schröder, a.a.O., S. 253f.
- 40) Albrecht Schönherr, Kirche als Lerngemeinschaft, Dokumente aus der Arbeit des Bundes der Evangelischen Kirchen in der DDR, Berlin (Ost) 1981.
- 41) Bloth, a.a.O., S. 351.
- 42) Nipkow, a.a.O., S. 223.
- 43) Herbert Ulonska: Religionslehrer und Kirche, in: Der Ev. Erz. 26 (1974), 5, S. 337-339.
- 44) Nipkow, a.a.O., S. 226.
- 45) Nipkow, a.a.O., S. 225.
- 46) ニプコウは、ここでユルゲン・ハバーマス (1929-) の討議 (Diskurs) 理論を用いている。「討議」は「理解しようとする協同的な意欲以外のすべての動機が廃止されることにつながるはずである」「行動の強制」の破棄を必要とする。そして、それ (討議) は「妥当性主張」を取り消すことを必要とする。すなわち、「討議は、意見や規範についての問題化された妥当性主張を正当化する役割を果たす」 (Jürgen Habermas, Vorbereitende Bemerkungen zu einer Theorie der kommunikativen Kompetenz, in: J. Habermas u. N. Luhmann, Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie – Was leistet die Systemforschung? Frankfurt/M, 1971, S. 117)。それは、対話に参加する人々が、発言の暗黙の妥当性主張に疑念を表明し、それゆえに理由を求めるということの表現である。これは宗教の事柄においても、大人の間でも、特に子どもの宗教への道においても、繰り返し見られることである。日常的な会話や理解は、討議や、理由を問う自由な論議的議論という形で行われるのではなく、「親しまれ、規範的に防御された言語ゲームの中で」、その妥当性が「素朴に」前提される、意味の文脈に基づいて行われる。ハバーマスはこの付き合いを「コミュニケーション行為」 (a.a.O., S.115) と呼んでいる。この (言語) 行為は、何が妥当するべきか、 (もはや) 議

論されないか、についての合意に基づいている。情報、行為に関連する経験は、規範的要件を実現するために交換されるが、それを根拠づけるためではない。しかしいつでも、以前は暗黙のうちに前提され、暗黙のうちに共通理解を可能にしていた規範の妥当性の意味が問題になりうる。今や初めて、討議が、古い合意や新しい合意の可能な回復として、再び視野に入るのである。

47) Nipkow, a.a.O., S. 225.

48) Nipkow, a.a.O., S. 219.

49) Nipkow, a.a.O., S. 218.

50) Ebd.

51) Nipkow, a.a.O., S. 219.

52) Ebd.

53) Mette u. Weinrich, Art. Kirche, Gemeinde, Sp. 1042.

54) 田中智志『人格形成概念の誕生 近代アメリカの教育概念史』東信堂、2005年、13頁。

55) Nipkow, a.a.O., S. 227.